

## 寄稿 2

## 英文科の創設の年を巡って——併せて『百年史』（部局史一）の関連事項など——

上野景福

## 創設五十年の記念行事の頃

かれこれ半世紀前のことである。こんな感傷的な思い出から書き初めることをお許し頂きたい。当時、私は本学文学部英吉利文学研究室の副手をしていて、助手の梶木隆一君（現在・東京外国語大学名誉教授・明星大学教授）と連れだって鎌倉山へ向った。ここに本学英文科（時期により英文学科、英吉利文学科と称した）第一回の卒業生の立花政樹翁が官を辞したあと、悠々自適の生活を送っておられるので、英文科創設当時の学生としてじかに見聞された昔話を伺うためであった。昭和十一年十月二十五日のことで、秋晴れの爽やかな日で、二階の和室の客間からは周りの山や谷が奇麗に見渡せた。

翁は当時七十三歳とっておられたが、若者を凌ぐ迫力と気概を漂わせ、昔日の記憶も実に鮮やかで、必要に応じて別室から関係資料を即座に持ち出してこられた。

一つ私事にわたることを付け加えさせて頂くなら、翁は英文科を明治二十四年に卒業したあと、直ちに山口高等中学校（後の第一次・山口高等学校）に教授として赴任したと話されたので、それなら私の亡くなった父・景明（当時の幼名・朔郎）も山口高等学校で学んだと聞いています、と言ったら、すぐに当時の間廬帳だか学生名簿だかを持ち出してこれ、ああ確かにあった、と大きく頷いておられた。こんなことがあって翁には特別の親近感を懐いたものである。

以上の記事からも伺えるように、翁は整理整頓ならびに必要な資料の保存には天賦の才能をお持ちのようだった。令孫もこれを受け継がれ、『東京大学百年史』（部局史一）の巻頭を飾る貴重な卒業写真と卒業証書は何れも立花家が秘蔵しておられる多くの資料の中から拝借できたものである。

さてこのとき翁に伺った談話筆記（現在ならさしづめ取材記録というところ）は翁にも目を通して頂き「その頃を語る」の題下で『東大英文学会会報』（第九号、昭和十二年二月発行）に載っている。その

後この談話筆記が英文科初期の実情や漱石の学生時代を知る一等史料として度々引用されている。

因に『東大英文学会会報』は昭和五年三月に一号が発行され、十一号が昭和十五年七月に出たまま、戦時下となって、そのまま立ち消えてしまっているが、寄稿者のうちには市河三喜、斎藤勇、中野好夫、佐々木達、朱牟田夏雄、(学生時代の)荒正人、木下順二などの名も見られ、当時の英文科の動静がわかって、今となっては貴重な資料である。

なぜ英文研究室が第一回の卒業生に生き証人として英文科発足当時の話を伺う企画をたてたかという点、『東京帝国大学五十年史』(上巻、一二八ページ)に「明治二十年九月九日に至り、史学科、英文学科、独逸文学科の三学科を増設し」とあるので、明治二十年(一八八七)は英文科の誕生した年であって、それから数えて五十年目がちょうど昭和十二年(一九三七)に当たるので、これを記念してささやかではあるが、初心忘るべからず、回顧の記録を作っておきたかったからである。

明治二十年九月に文科大学に増設された学科の一つに英文(学)科があったことは『五十年史』以外に『東京帝国大学学術大観』(総説・文学部)(昭和十七年)にも出ていて、当時他に大学がまだなかった時期であるので、広くわが国における英文科のそもその初めが、実にその明治二十年ということとなり、わが国の英文学研究史の上からも明治二十年は英文科元年として記憶すべき年とされてきた。

従来本学関係の記録は、ここに挙げた事例からもわかるように『五

十年史』を抛り所としてきた。しかし今後は『東京大学百年史』が公刊されたので、『五十年史』に替って、それが基準となり、根拠となる。それゆえ『百年史』に、もしも不備な箇所があれば、これは一刻たりとも放置せず、直ちに補正の手段をとらなければならない責務がある。

本学に英文科が創設された年は従来の公式の文献では「明治二十年」であって、われわれはこれを基にいろいろと行動してきたことは上述したとおりである。ところが今回公刊された『東京大学百年史』(部局史一)ならびに、その一部を別刷にした(部局史一、文学部の抜刷版)の中では、英文科創設年を「明治二十年」ではなく「明治二十二年(一八八九)」と明記しているところが二箇所にある。これは誤植というよりも誤記であって、早急に補正すべき箇所である。

これを機会に、私が従来から些か関心を懐いていた草創期の英文科の関係記事を、『東京大学百年史』(部局史一)の中で読み進むうちに、幾つか気付いた疑問の箇所があるので、それを次に記し、併せて補正私案とその理由を述べて、大方のご参考に資したい。

× × ×

さて第一回卒業生・立花政樹の「その頃を語る」が公けになったのは昭和十二年(一九三七)で、それは英文科創設五十周年の記念行事の一つだった。今年、はや昭和六十二年(一九八七)で、それからまた五十年目となり、英文科創設百周年を迎えることになる。果してどんな記念行事が企画されているやら。

疑問箇所と補正私案

凡 例

- A 『東京大学百年史』（部局史一）の原文
  - B 右に対する補正私案
  - C 補正の理由
- ページは特に断らない限り、（部局史一）のそれを示す。例線は補正箇所。

一、A 本学に英文学科が設置されたのは……明治二十二年（一八八九）、（七四二ページ）

B 本学に英文学科が設置されたのは……明治二十年（一八八七）

C 本学に英文学科が設置されたのは『五十年史』の記載にあるとおり明治二十年であって、その後もこれを改変する事由はまったく起っていない。従ってこの年号（明治二十二年）を『五十年史』の記述どおり（明治二十年）に改めなければならない。今回の『百年史』でも、このページと次のページの二箇所以外では、すべて英文科の創設年を従来どおり明治二十年と記している。すなわち『東京大学百年史』（通史一）（九三二ページ）文科大学で学科増設の箇所、（部局史一）（六八九ページ）言語学科のうち博言学科の箇所、（七六七ページ）独逸文学科設置の記事、（七八九ページ）フランス語関係の記事、など。しかし大事なことは、通史や隣接学科の言語学、ドイツ語、フランス語などの関連記事の中で、いくら英文科の創設年を正確に明治二十年と記述してあっても、肝腎の本家本元の英文科自身が記す年号

のほうに一般が信憑性を懐くのは当然である。すなわち「明治二十二年」を今回持ち出したのは、（部局史一）の文学部の中の、こともあろうに英文科が執筆した第五節英語英米文学の「前史」の一行目（七四二ページ）であり、さらにそれを追認するかの如く、次の「創設期」の一行目（七四三ページ）なのである。

二、A オランダ人フルベッキ（七四二ページ）

B アメリカ人フルベッキ

C フルベッキの国籍については多くの疑問点がないわけではない。しかし本学では一貫して米国人フルベッキと記している。たとえば（通史一）（九五ページ）に「米人フルベッキ」、（一八六ページ）に「フルベッキ米」、（一八七ページ）に「亜人フルベッキ」、（三三七ページ）「フルベッキ 米」など。参考資料として『学習院百年史』（第一編）（一四五ページ）では「開校当時の教職員」の中で「フルベッキ（米国人）」となっている。ただし『東京帝国大学学術大観』（総説・文学部）（四六四ページ）では「元来オランダ人であるが、北米合衆国に於て宣教師となり」と叙述しているのが正確だが、国籍には触れていない。再度来日した晩年に無国籍者となり、わが国に功が大であったというので外務省が特許状を交付した（明治二十四年）というが、少くとも本学（の前身）と関係があった頃はアメリカ籍であったのではなからうか。『百年史』としては（通史一）と歩調を合せ（部局史一）においても、本学の統一見解に同調しなければいけない。

三、A ホートンが……文学部教授として(七四三ページ)

B ホートンが……文学部教師として

C 外国人教師に対し「教授」ということが稀にないことはないが、正式の文部省用語としては「教師」であって、これは明治時代だけでなく、昭和の初めまで続き、英文科のブランデンやデルレも教師という名称だった。

ついでながら(通史一)(三四〇ページ)の「外国人教師一覧」の最後に挙げてある「ホーンソン」とは明らかにこのホートンのことで、従ってホーンソンに対し原綴不明と注記してあるのは、(部局史一)(七四三ページ)に掲げてある原綴り名を記せばよい。

四、A 当時工部部の……ディクソン……が英文学、史学の教師として(七四三ページ)

B 当時工部大学校の……ディクソン……が英文学及び英文学の教師として

C ディクソンは明治十三年一月から工部省管轄の工部大学校の英語英文学教師を勤め、明治十八年十二月二十二日に工部省が廃止され、これに伴って工部大学校は文部省に移管され(通史一)(六九九ページ参照)、明治十九年四月一日付で「……三年間文科大学英语学及英文学教師として雇継続」(雇外国人教師・講師履歴書「東京大学」という辞令が出ている。なお当時「工学部」という名称の学部はまだ存在していなかった。要するにディクソンは工部大学校から文科

大学へ、現在の用語で言えば配置替えとなったのである。

ディクソンの専門は右の辞令面にあるとおり「英文学と英文学」であって、これは工部大学校以来変わらず、文科大学となってもそのまま続いたのである。ただしディクソンに、「英文学、史学」という分担が一回だけ出たことがある。それは文科大学が開設した明治十九年に、史学担当の教師リース(Ludwig Riess)の来日が遅れたため、リースの着任するまでディクソンが史学を臨時に分担したことである。「英文学、史学デュエムス・メイン・ヂクソン」と明治十九年文科大学の教職員異動(『五十年史』一三二七ページ)にあるのはそのためであるが、それはあくまでこの年度限りの一時的なものであったことを忘れてはいけない。「第二学期、即ち千八百八十七年(明治二十年)二月の中旬に於て教師リース氏の来着するを以て史学の教授は同氏に移せり」とディクソン自身「申報」で報告している。

五、A 教えを受けたものに、斎藤秀三郎、岡倉由三郎らがいる(七四三ページ)

B 教えを受けたものに、英文科の学生以外に、工部大学校時代に斎藤秀三郎、文科大学博言学科の撰科生に岡倉由三郎らがいる。

C 原文には高名な二人の英語学者の名が挙げられているので、これではこの二人とも本学の英文科の学生または卒業生と受取ってしまうのが自然である。確かにこの二人ともディクソンに英文学方面の薫陶を受け、その影響が強く認められるのは事実だが、本学英文科とはま

まったく関係がない。斎藤秀三郎は工部大学校の明治十三年頃の学生でディクソンに習ったが、中退して卒業していない。岡倉由三郎は文学部博言学科に明治二十年に撰科生として入学している。

六、A 明治二十二年（一八八九）文科大学に英文学科が設置され（七四三ページ）

B 明治二十年（一八八七）文科大学に英文学科が設置され

七、A 英文学専修第三回明治二十六年（一八九三）の卒業生であり（七四五ページ）

B 英文学専修第二回明治二十六年（一八九三）の卒業生であり  
C 本学に英文科が創設されたのは明治二十年であるが、本科生（正科生ともいった）の入学者はいなかった。翌年の明治二十一年になって最初の入学者が一人生れた。これが立花政樹である。次の明治二十二年にもまた入学者が現れず、明治二十三年に漱石夏目金之助が一人入学した。（以上撰科生は数えない。）そしてそれぞれ三年の後に卒業している。荒正人『増補改訂・漱石研究年表』（昭和五十九年）（一四八ページ）には「（明治二十六年）七月十日、午前九時から、帝国大学文科大学卒業証書授与式行われ、（漱石は）英文学科第二回生……として卒業する。」立花政樹を英文科第一回目の学生と呼べば、漱石は第二回目の学生である。

八、A 鈴木貞太郎が（七四六ページ）

B 大拙鈴木貞太郎が

C 英文科の講師としてこの前のページに「漱石夏目金之助」、「柳村上田敏」とあるのに倣うべきである。殊に大拙の本名はあまり知られていないので…。

（うえの かげとみ 名誉教授）